

ができ、定年後も勤めましたが、七十歳のとき大病を患い退職いたしました。十年経った今も一カ月に一度は病院通いですが、なんとか元気に悠々自適の生活を過ごしております。両家の両親も今では亡くなりませんが、親が健在であったからこそ今の私どもの幸せが得られたと、この恩は忘れません。

昭和の激動を語る世代が少なくなり、戦争体験が風化していくことは、我々体験者が段々減っていくように、寂しい限りです。敗戦から五十余年、長い月日で記憶も年々薄れて、過ぎ去ったところが夢のような気がします。

平和な今の日本が後世にいつまでも続きますよう祈ります。

今日も暮れゆく

香川県 中村 品子

その地の名は、満州国東滿総省寧安県蘆屯開拓団で

ある。蘆屯開拓団は、郷里の四国香川県にある屋島に似た山麓に広がる大地に開拓された。

昭和十三年、父三十八歳。日本国の食糧増産の任を背負って、単身で満州へ渡った年である。当時の四国新聞の切れはしには、「征け！ 我らの戦士」の見出しの中で「功ならずんば死しても帰らぬ決意——」と、父が答辞を述べたものが残されている。

未開の大地、そこにれんがの家を建て、学校を造り、一応の生活ができるようになって家族を呼び寄せたのが昭和十五年の春である。一枚の小さな写真、裏には母の字で、「昭和十五年七月、品子（私）小学校一年生」と記されている。寄宿舎の前に並んだ写真には、女の先生一人と男女の子供が十五人いる。

開拓団の部落は五つに分かれていた。入植三年にして、団員は百二十三人、これに妻子を加えて四百六十三人の大家族になっていた。開墾した水田百町歩、畑七百町歩、水稲、小麦、大麦、大豆、馬鈴薯、精穀物にはヤンマー十五馬力の発動機も取り入れた。自家用を差し引いても、供出するには十分の成果が上がるよ

うになっていた。日本馬、満馬、牛、子羊、豚の飼育も各家庭でやっていた。

満州へ渡る前の父は、高松中学校に勤めていた。父の遺品としてある写真は、一枚は着物姿、もう一枚は入学式に職員一同で写したものである。前列に腰かける姿は、三つ揃いの背広を着て、こぶしを握っている。菊池寛もこの中学の出身で、父がこの学校にいたころ訪れたらしく、菊池寛の字で色紙が残されている。それには、「人生行路難 山にも在らず 水にも在らず 唯人情反復の間に在り矣」と書かれている。日本に置いていたタンスの引出しから出てきた一つである。

開拓団事務所は、内地そっくりの堂々としたものを建て、本部長として父は働いていた。父は仕事柄、満語はペラペラで、現地人を雇って農作業に当たらせ、作業所も共同で、味噌、醤油までも製造をはじめめるようになっていた。五つの部落に住む人の生活がゆとりあるものになろうと、情熱をもって村造り、国造りに励んでいたようである。

両親と共に暮らした大平原の中の小さな部落、部落

の名はハマホーズの灯がともる。父は私を牛車に乗せて、ハマホーズから本部にある学校の寄宿舎まで、毎週送り迎えをしてくれた。零下三〇度になる冬には、牛車に布団を敷いてその中にもぐり込んで、ガタンゴトンと揺られながら通った。冬の遊び場は、川がスケート場になった。

春がくると、白いニラの花が咲き、やがて野原一面に百合の花が群落となる。牛の大きな尻を棒で「チョッ、チョッ」と言いながら叩く。空と平原を二分した風景の中に、曲がりくねった道を牛車が進む。広野の果てまで続く田んぼの畦、西瓜、真桑瓜、白菜、えんどう。家の中の一部屋は、ゴロリとした西瓜やトマトでいっぱいだ。外では、ロバが目隠しされて石臼を回している。ぐるぐる、ぐるぐると日がな一日回っている。時々、満人がマントーを持ってきてくれる。手のひらに温かくふくれていた。

寄宿生活で嫌だったことは、スズメの皮むきだ。皮をのけて肉を焼いて食べる。男の子が、ぐったりしたすずめを私に投げつける。寄宿舎の屋根には、黒くな

るくらいのスズメが群れていた。

やがて太陽が西の空に沈むころ、ここは異国なんだという何とも寂しい気持ちに包まれた。遠くに狼の声など聞いたという話をきくと、夜は怖かった。

昭和二十年、私は小学六年生になっていた。大人はみんな、満蒙の荒野を開墾し、さらに食糧増産をと懸命に取り組んでいた。故国日本の発展に尽くす情熱は、父の胸にもまだこれからといったときではなかったらうか。しかし、太平洋戦争がだんだん激しくなっているのか、広野の空にも飛行機が飛ぶようになった。

残された父の手帳には、「昭和二十年八月十三日、各部落が本部へ集結した」とある。すでに、十八歳以上四十五歳以下の男子は召集されていた。父は四十五歳をわずかに過ぎていたので、残された団の家族をどうするかの責務を負わされていた。

「八月十九日、ひとまず東京城」。日本は戦争に敗れている”というビラが空からばらまかれた。しかし、それを信じる者はなかった。団員の数人が本部に帰ったが、そこは現地人がふみ荒らして、とても住める状

態ではなかった。帰る家を失い、日本が戦争に敗れたというはっきりした情報もないまま、八月十九日から九月四日まで山暮らしの状態となった。

山暮らしは、木の枝を切り、それを屋根がわりに並べた。食べ物は近くの田んぼからとってきて煮た。木の枝で箸を作ったのを覚えている。昼間は煙が出ると飛行機に見つかるといって、夜遅く火をたいた。何の進展もないまま、着る物も食べ物もなくなって、とにかく駅のある方へ歩くことになった。

九月五日から毎日場所を移動し、十七日に延吉着。その間に、匪賊の襲撃にあい、並んで歩いてきた人たちは、思い思いの方向に向かって逃げた。天橋嶺という橋までできたが、爆破されていた。小学六年の私の首まで水につかった。この川を渡れずに、もとの開拓団へ引き返した者もいた。この橋で多くの人が亡くなったが、ここは残留した人と、南下して長春へ向かった人との運命の別れ道でもあった。

九月十七日に延吉に着いたが汽車はなかった。線路は不通で、また徒歩で吉林へ向かわなければいけない。

九月十九日から、河内毛利での生活が十月一日まで続いている。

十月二日、吉林行。十月三日、吉林着。一行百二十一人。十月四日から二十六日まで吉林での生活が続いた。吉林のどこの収容所で、どのようにして生き延びたのか、忘れてしまった。とにかく、南下しようという望みをもっていた。

吉林に集結した人は、各方面からの開拓団員であった。みな着たきりの、浮浪者の姿である。わずかに持っていたお金で餅を買って食べたが、父は体をこわして下痢ばかりしていた。ソ連兵に、時計を出せとか、お金を出さなければ列車に乗せないとかいわれたようだ。男と女を別々に並ばせて、身体検査をし、腕に何十個もの時計をした兵隊もいた。緑色の目をした大きな男を見るのは恐怖だった。吉林からいつ列車に乗ったのか、父の日記はこれ以後空白である。

「十月二十七日、新京特別市室町国民学校着」これは姉の字である。姉は私より六歳年上で、八月一日に「苑家屯」にある教員養成所に行ったので別れ別れの

状態であった。

新京まで南下すれば、必ず日本へ帰れるという。そして姉にもきくと会えると信じていた。弱り切った父が、人を頼んで文部省の関東局へ捜してもらっていた。私は、室町国民学校の校門で立っていた。

「十月二十九日、佐紀子（姉）対面す」。姉は背広を着て、頭は丸坊主の姿だった。「姉ちゃん」と言のまま、真っ黒な涙を流した。両親にも出会えた喜びは、束の間だった。「十一月一日、午前二時ごろ。父、空しくあの世の人となれり」。「世話になったなあ」が父の最後の言葉であった。

私の脳裏にあるのは、ここまで連れてきた父の強い意志である。徴兵は免れたが、百人をこえる人達を、ここまで引率してきた。ここまでくれば日本へ帰れるという新京である。新京に着いて五日目に父は死んだ。収容所の片隅で、一生の終わりである。垢にまみれ、生気を失った男か女か分からぬようになった人々が、教室中を埋めた。一つの教室に死者が並べられた。

「十一月二日出棺、午前七時小雪」。カチンカチン

に凍りついた遺体が、馬車に積まれて、遠い大房身という所へ運ばれて、穴に埋められたという。室町国民学校の収容人員は約二千人、死亡者数八百人、と推定されている。

寒さは日毎に増し、何もかも凍りついた。便所はあふれ、凍った。広い運動場は、汚物が次々に広がってはずたかくなっていた。残された者は、自分の力で生きなければならぬのだ。絶望と不安、その上寒さに耐える日の中で、六歳上の姉が頼りであった。

「しっかり働き、力の限り御奉公しよう」と姉は書いている。先生の卵として関東局官舎に住み込み、文部省の教官の食事を作って給料をもらっていた。

私たち家族は、姉のおかげで官舎の一部屋に移り住むことができた。姉は米や味噌の食料品を運んできては、何かと力づけてくれる。給料をもらうと、この冬を越すための石炭をまず買った。

妹が病気になる、続いて私も寝込んだ。母も発熱して、三人が病気になるってしまった。三人が頭を並べて寝る日が十一月の末まで続いた。私たちは正月を迎え、

一月、二月ごろからじわじわと体もち直してきた。

新京の遅い春が感じられるころ、元氣を取り戻した私たちは、行商をすることになった。机の引き出しに、せんべいの入った袋を五つ六つ並べる。「せんべいはいかがですか」。満人にも、ロシア人にも、「せんべいはいかがですか」と呼びかけた。一袋が五円か十円ぐらいだったろうか。母の日記には、「百円の仕入れ、五円のもうけ」と書いてあった。

母と私と妹は、毎朝吉野町にあるダイヤ街に行った。ここには、おいしそうな食べ物が豊富に並んでいた。ピーナツ、ひまわりの種、ねじり菓子、かりん糖、私の目をまん丸くした七色のあめ玉、虹のような色であった。「試食してください」と、貧しい身なりをした私たち親子にも食べさせてくれた。この試食につられて、私たちは出かけた。道はツルツルに滑りそう、三人はしっかり腕を組んで歩いていった。「異国の日本人」という不安な気持ちの底にあったのだろうか。

そっと、せんべいの袋をのぞき込む。一枚取り出して食べる。おいしかった。また別の袋の一枚出して

食べる。袋はまた元のように大きくふくらませて、明日売ろうと思う。「新聞はいかがですか」と街頭の中に立って新聞売りもした。煙草もひまわりの種も売った。子供は生活の担い手になって働いた。満人が私を追いかけたこともあった。新聞の束を放り投げて走りに走ったから、その日はもうけがなかった。

中学生くらいの男の子が近くに住んでいた。住んでいるといっても家はなく、一人ぼっちだった。その子は、狐のしっぽを尻につけていた。突然に人の前に現れて、びっくりさせていた。追いかける足はひきずっていた。足をひきずりながらお尻につけた狐のしっぽは、生きるためへの手段だったのだろうか。母の残した襟巻きだったのかもしれない。あの奇妙な光景は、ふっと今でも思い浮かぶのだ。

ある夜、官舎の前で暴動が起きた。官舎の前には食糧倉庫があった。夜中のただ事でない物音に、母も私も無言で行った。倉庫内には、米、メリケン粉、缶詰があった。栄養失調のやせた体で、こんな重たいものがよくかつげたと、後になって笑い合った。思い

がけぬ食べ物をつかんだ喜びも、翌朝の銃声に息をつめた。倉庫番が射殺されたのだ。道路には、幾筋ものメリケン粉の白い線がふみにじられていた。

家の中の搜索がはじまり、私たちはリュックサックにそれらを隠して近くの児玉公園へ毎日遊びに出かけた。コークス掘りにも出た。昼間は外で過ごし、日が暮れて家へ帰った。母が鍋いっぱい炊いた白米のご飯であったが、胸がつまって食べられなかった。開拓団を出てから八カ月ぶりの、ほかほかの米飯だったのである。

春がきたら日本へ帰れる。夏がきたらと、私たちは帰国という希望を胸に頑張っていた。

物売りをしていたある日、近くの劇場にまぎれ込んだ。舞台の光景は、美しい振袖を着て、透き通るような声で日本の歌を歌う、斉田愛子という日本女性だった。新京へもソ連兵が侵入して「愛子はいないか」と銃を突きつけられる夜が続いて、その人の名を忘れられないものにしていった。

いつ、新京をたって帰国の途に着いたかはわからない

いが、日本に帰り着いたのは、昭和二十一年十月十八日である。とすると、九月の半ばごろには出発したのだろう。新井からコロ島まで列車、コロ島から船に乗って博多に着く予定だった。

コロ島まで、一週間くらいはかかったろうか。何度も列車は止まり、動かなかった。偶然にも、あの斉田愛子さんも同じ列車だった。カーキ色の軍服を着て、まるで男のような格好だった。私たちが歌を歌ってとおねだりすると、彼女は歌って聞かせてくれた。

春は早うから 川辺の芦に

かにが店出し 床屋でござる

ちよっきん ちよっきん ちよっきん

明るい歯切れ良さがすがすがしかった。というのも、私たちは着たきりすずめの、頭からDDTのくさい白粉をかけられた姿だった。この「あわて床屋」という、かにの床屋さんの歌は、私の心にいつまでも残っていた。

引揚船は「興安丸」。船には一週間くらいいただろう。胸には日本国の住所を縫い付け、荷物にもすべて

住所を書きつけていた。体を横たえると転がってしまいそうな女界灘を無事に過ぎ、「いよいよ日本の博多に着くぞ」という歓声が船の甲板にこだましていた。そのとき、一人の男の子がてんかんを起こして海に落ちた。すぐに救助の人が飛び込んだが、子供は死亡したということだった。

香川県香川郡大野村、母の里である。琴平へ通じる琴平参宮電鉄の一宮駅で下車する。母の母はもうこの世になく、朝鮮から引き揚げた母の姉と、長男一家が住んでいた。いつまでもここに厄介にもなれず、亡き父の里へも頼れなかった。結局、母の姉方の納屋を借りて暮らすことになった。

母子家庭ということ、生活補助金を受けていた。母は他人の嫁入り衣装を縫うほどの腕をもっていたので裁縫をした。姉は銀行に就職して、なんとか生活の第一歩を踏み出した。私も妹も、学年を下げて小学校に通い始めた。母も肩身が狭かったのか、役場へお金をもらいに行くのは私の役目になった。村役場の窓口に立って印鑑を差し出すのが、私の心にもためらわれ

て、印を地面に落とした。透明な水晶の印であった。黒いばんそうこうをはられた角印は、あのころの生活をしのばせたまま、私の手元に残っている。

物のない時代であった。家中、電気一つで仕事しよう”という電力節約を呼びかけるポスターが二等に入選した。パチッとひねった電灯の下で、母は裁縫箱を横におき、姉も妹もりんご箱を前に本を並べている絵である。ワラ半紙に鉛筆書きの、破れかかったもの。借家の窓には金網が張られているので、鶏小屋を改造したものだ。そこに一つの電灯がぶら下がっているのである。こんなちっぽけな絵が、わずかに生活を明るくしていたのだろう。

中学時代は、何にでも一生懸命だった。卓球やバレーボール、英語劇もした。何にでも挑戦することで私自身を頑張らせた。母家に住んでいるところが、ラジオから私たちの住む納屋まで電線を引っ張って拡声器をつけてくれた。「鐘の鳴る丘」や、ラジオ歌謡が流れってきた。そのころ「陽気な喫茶店」という番組があり、古川ロッパさんらの常連の中に、斉田愛子さんの名前

を聞いた。引揚げの途中で聞いた”ちよっきんな”の歌を再び耳にできた。私は、殺風景な生活の中で、唯一の、胸のときめきを覚えるラジオに聞き入っていた。

昭和二十八年、高校を卒業したものの、就職難の時代であった。何しろ就職の条件には、両親が健在であることとあった。私などのような家もなく金もない子供には、求人がなかった。そのような中で青い鳥を追い求めるように大阪で就職した。少しでも母親を楽にしたい。早く親孝行がしたい一心だったが、生活はそう甘いものではなかった。何度か仕事を変わり、結局母の元に帰った。

平成四年七月、姉、私、妹は、中国黒龍江省牡丹江寧安訪問団ツアーに参加した。

姉六十四歳、私五十八歳、妹五十五歳である。昭和二十一年十月十七日に帰国してから四十六年ぶりの墓参である。私たち姉妹三人以外は全員男性の二十一人による、十一日間の旅となった。男性は、当時十四、五歳の義勇軍で、私の住んでいた近くの東京城で終戦

を迎えている。それぞれの、当時の思いは深く、さまざまな人生を生きてきた人ばかりだ。生涯に、一度は訪ねて確かめておきたい土地が、かつて両親と暮らしたハマホーズである。

北京からハルビンへ、そして牡丹江、五日目にハマホーズへ向かう。同じ開拓団の部落に住んでいた男性の山崎さん、姉と妹、私。気温三十五度。現地の雨季を避けた季節である。

マイクロバスの窓から眺める道端には、退屈そうな物売りの姿が目につく。「一斤五毛」と黒板に書いた西瓜やまっ黄色の真桑瓜がきれいに並べられている。大通りから一步裏道をのぞけば、れんがの家、崩れかけた土塀、昔見たことのある風景である。

中央線のない一本道を、人や車、三輪車、自転車、牛車を通る。バスは、パツパラパーとけたたましい警笛を鳴らしながら、どンドン追い越していく。でこぼこ道のため、何度も飛び上がり、頭を天井にぶっつけそうになった。「あれが石頭駅やでー」と山崎さんの上擦った声。畑の前方に建物が見えた。道は線路と平

行しているようだ。

初めて満州へ渡った時、父が「セキトー」という駅で待っていた。朝鮮から何日も汽車に乗って、やっと降り立った「石頭駅」である。「この辺りが、一番土が肥えとったんや」と山崎さんが、また叫ぶように言いが肥えとったんや」と山崎さんが、また叫ぶように言いが垂れ下がっている、あの木が本部へ入る目印だった。バスは砂煙を上げて、またたく間にその木を通り越した。

やがて石橋が見えた。川にはあひるが泳いでいた。この橋を渡ると、開拓団本部の入口だった。建物も、学校も、大きく立派に建っていた。マイクロバスから降りた私たちを、二列に並んだ子供たちがにこにこしながら行きすぎる。私は、何か相通じる親近感がわいて手を振った。中国人が、私たちに話かけてきた。見わたす限り平原の広い丘である。ここまで来たら、もうどうでもいい気持ちになって、小高くなった土を前にして座り込んだ。

父へは、日本の煙草に火をつけ、酒のふたを開けた。

渡満後、三カ月でアマーバ赤痢にかかって死んだ妹へは、こんぺい糖や菓子を供えた。「なんでこんな遠い所まできたんなー」姉はたちまち声を詰まらせた。私も長い間、女の子ばかり四人をもつ父が、なぜ開拓団に入ったのかと思っていた。「香川県第八次開拓団 蘆屯開拓戦士之霊位」と書いた掛け軸を棒につるし、それに向かってお経を唱えた。空と大平原の中に埋まるように座っている私たちの光景が、現実ではないような錯覚に陥っていた。

ハマホーズの部落への道をたどった。道幅は広く、両側に広がる農場は、日本では見ることができないスケールの大きさでうねっている。父と馬車に乗って、あるときは花を摘み、あるときは百合の根を掘って通った道である。北京からずーっとここへくる列車から眺めた風景にも、果てしなく続くポプラ並木と、整然とした美しい農場に見とれている。その中でも、このハマホーズが一番よく肥えた土地だったと山崎さんは教えてくれる。

今、この東北地方は、中国国内でも最大の農業生産

を誇っていると聞く。父は、この土地を耕した開拓者だったのだ。

ハマホーズにある山崎さんのお母さんのお墓は、盛土をして、白い墓標には中国名と日本名が並んで書かれていた。山崎さんのお母さんは小さな子供と残留し、山崎さんは一人で日本へ帰ったのだった。その後、中国人と結婚した山崎さんのお母さんは、三人の息子を産んだ。その息子たちや孫の家族が十五人になって、今回の対面となったのである。

家の周りには棚もなく、昔のようなれんが造りの小さな家がポツポツと並んでいる。生活は貧しく、一カ月働きに出て三千円ということだ。しかし服装などはさっぱりとして、私たちを招き入れてくれた。円い飯台には、大きなマントーや、西瓜、牡丹江から買ってきたというあひるの卵もご馳走になる。土間に立つ小さな子供が順番に礼をしてくれる。「この場所は、たしか那須（私の旧姓）さんの家があった所ですよ」と言ってくれた。明け放した窓から入る風が、とても心地良く、ふるさとへ帰ったような気分にくれた。

ここは、よその国なんだ。帰り道、山崎さんはどこでもいいから、何枚でも写真を書いてくれといった。私は、もう二度とここへ来られないのだと思いつながら、去りゆく景色にシャッターを押し続けていた。

延吉から汽車に乗って、朝もやの中に「長春東站」(新京)の駅に着いた。敗戦後、ここまでくれば必ず日本へ帰れると父が言った新京である。

長春の街はポプラ並木が美しい。シンプルな服装で、自転車か東へ西へと流れるように連なる。市内には、「旧満州国」の首都であった建造物が多く残されている。

「関東軍司令部」は「吉林省政府」となり、児玉大将の銅像があった児玉公園には、毛沢東の銅像が建っている。小学六年生のとき、リュックサックに食糧を入れてここへ遊びに来た。遊んだといっても、決して楽しいものではなかったのだが――。ラストエンペラー溥儀の皇居は「地質学院」になっていた。

室町小学校を訪ねた時、校内へ通してくれた。暗い通路を抜けると、運動場へ出た。二階建ての校舎の真

ん中に太い煙突、松の木が二本。コンクリート壁に、五輪のオリンピックの輪が書かれていた。かつて、この運動場にいっぱいだった汚物は、雪解けの季節にだれが処理をしたのだろうか。毎日、教室から運び出された遺体は、どうなったのだろうか。

見上げる空に雲一つない晴れやかさである。私たちは、長江路と名の変った吉野町をぞろぞろと歩いている。油で揚げたかりん糖、二〇センチぐらいのねじり菓子もある。昔住んだ官舎は見つからなかった。

再びバスに乗り、大房身へ向かう。大房身といっても広くて、一部は飛行場になっている。現地の人に聞いてもはっきりとした答えはなかった。背丈の四、五倍はある樹木の繁みをくぐるようにバスは走り、どこまで走っても、墓標一つない広い林であった。私たちが立った場所は、真昼の陽を遮り影を落としていた。この樹の下に幾万の屍が眠っている。一本一本の樹が墓標なのである。風が吹き抜け、葉がざわめいた。

三姉妹で生きたればこそ、この地に立つことができ

た。生ある限り、忘れ得ぬ満州である。私は無意識に樹の葉をちぎった。小刻みな葉はとがって、針をさすような痛みを覚えていた。

今日も暮れゆく異国の丘に、「父よ、妹よ、サヨナラ」と胸の内で告げた。

鉄路警備の思い出記

福岡県 立花 貞十郎

一 海外居住の動機

昭和十一年四月、満州国派遣軍綏芬河駐屯のため博多港を出発し、同月綏芬河駐屯の憲兵隊の受験を希望したが、受験前日、当時第二十四連隊副官陸軍少佐の叔父井田君平に反対され受験できず、下士官になれとのことで昭和十二年二月現地除隊し、同二月南満州鐵道株式会社鉄路局横道河子警務段巡長を拝命した。

二 経歴

昭和十三年四月、治外法権撤廃により満州国治安部

に移管、同巡長に任命され、鉄道警護隊奉天学院に入學。十二月二十四日帰隊し、即日付で三江省佳木斯鐵道警護隊に転勤命令を受け、昭和十四年四月、同警護隊八虎力警護隊分所長。昭和十五年四月、弥栄警護分団長を命ぜられ八虎力分所長兼任並びに千振分団、追分分団の一部を担当することになり、行政、鉄道警護、警備、司法、その他宣撫工作（住民に対する宣伝）などにいたるまで責任をもつことになった。

三 弥栄村の思い出

○雉撃ち

終戦前、西弥栄村開拓団長栗田実氏及び医師早川氏と私三人で鮮系部落の水田や高地などに暇なとき再三雉撃ちに行った。多いときは百羽ぐらいの雉の集団をよく見かけたものである。私も雉撃ちが上手になり、一日最高の収穫は五十八発撃ち雉三十一羽、兎五匹をとった。

○ノロ鹿撃ち

ノロ鹿は、西弥栄開拓団西方高地並びに大梨子鎮高地にかけて、昭和十四年ごろは三十頭ぐらいの集団が